

入学前教育プログラムの設計に向けた早期合格者の特性分析

露木 隆（佐賀大学）

本研究は入学前教育プログラムの設計に向けて、学校推薦型選抜や総合型選抜による年内合格者（以降、早期合格者とする）を対象とした 5 種類の調査と、高校教員への質問紙調査の結果に基づいて早期合格者の現状把握や特性分析を行った。その結果、高校から課せられる課題量に差があることや、一般選抜の合格者に比べ親和力や協働力といったコンピテンシーが高いこと、入学前教育に大学での学びや生活のイメージを獲得できたり、大学で必要となるスキルを身に付けられたりするようなプログラムを求めていることが明らかになった。さらに、合格決定後にモチベーション¹⁾が低下する場合が多く、学習の動機づけ²⁾を目的としたプログラムを求める高校教員が多いことも明らかになった。

キーワード：入学前教育，特別選抜，高大接続

1 はじめに

2014 年の中央教育審議会答申を受け、多くの大学が多様な資質を持った学生の受け入れるといった視点から大学入学者選抜の実施要項の見直しを進め、総合型選抜や学校推薦型選抜の募集人員が拡大した。また、平成 23 年度大学入学者選抜実施要項（文部科学省 2010）では、「出身高等学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備をあらかじめ講ずるよう努める。」として、高等学校の理解も得ながら、合格者に大学の学びに必要な基礎学力を定着させる取り組みの必要性が示された。それに伴い、各大学は入学前教育プログラムの開発に迫られ、学習課題を課す等して早期合格者の基礎学力の定着に努めた。しかし、平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告（文部科学省 2017）では、「早期の合格後の学習意欲の維持は、高等学校・大学双方において大きな課題となっており、高等学校における適切な指導と併せ、入学前教育の実質化を図る必要がある」として合格決定後の高校生の学習意欲³⁾の低下が課題視され、学習意欲を継続する観点も含めた入学前教育の一層の充実が求められた。

このような背景のもと、学習習慣の維持や基礎学力の向上、大学での学びの動機づけを目的として多岐にわたる入学前教育が実践されている。しかし、基礎学力を定着させ、学習意欲を維持、向上させる入学前教育プログラムとはどのようなものか、各大学共通のコンセンサスが形成されているわけではない。その要因のひとつとして、入学前教育プログラムに関するこれまでの先行研究は、数学の対面補講の効果等、特定の取り組みに対する効果検証が主であり、プログラム全体の設計に早期合格者の特性が反映されたものではなかったことが考えられる。実際に、論文検索サイト

CiNii でキーワードを「入学前教育」として検索し、閲覧可能な 141 件の先行研究について調査したところ、概観の限り早期合格者の特性を分析し、プログラムに反映した例は見られなかった。しかし、自己調整過程と動機づけに関する研究²⁾を参照したところ、最初に多面的な調査から生徒の診断的評価を行い、生徒の特性を明らかにした上でプログラムが設定、実施されたことで、学業達成が改善された例もあり、入学前教育の実質化に向けたプログラムを設計する前段階においても早期合格者の特性を多面的に調査、分析することは重要だと考えた。

以上の理由から、本研究では入学前教育プログラム設計に向けて、複数の調査の分析結果をもとに早期合格者の特性を明らかにすることを目的とする。

2 調査対象及び方法

佐賀大学の入学前教育の現状や、早期合格者の特性、高校教員から見た早期合格者に関する課題等を明らかにするため、以下の①～⑥に示す調査結果を分析した。なお、インフォームドコンセントの観点より、各調査の実施及び分析は、事前に文面又は口頭で調査の目的や研究への使用について説明し、同意を得た上で行っている。

① e-ラーニングの実施状況調査

入学前教育で e-ラーニングを受講した早期合格者 190 人を対象に、学習習慣の維持に対する有効性や、課題の難易度について Moodle を用いてアンケート調査を実施する。また、Moodle の学習履歴から課題の取り組み状況を把握し、e-ラーニングの効果や問題点等を明らかにする。

② 入学者アンケート調査

毎年 4 月に全入学者を対象に入学者アンケートを実施している。その中の入学直後の気持ちや高校生活の振り返りに関する自己評価の結果について分析し、入学時に抱える不安や、早期合格者自身が強みと考える要素、一般選抜の合格者との違いについて明らかにする。

③ ジェネリックススキル調査

毎年 12 月に 1 年生全員を対象にジェネリックススキル測定アセスメントである PROG³を実施している。早期合格者の入学者アンケートでの自己分析の結果も踏まえて結果を分析することで、早期合格者自身のコンピテンシーに関する認識と実際の特性との関連や、一般選抜の合格者との特性の違いについて明らかにする。

④ 入学前教育事後アンケート調査

2024 年入学の全早期合格者 220 人を対象として、入学前学習の自己評価、求めるプログラム、高校から課せられている課題内容等について調査を行う。早期合格者が求めるプログラム像や早期合格者を取り巻く環境について明らかにするとともに、e-ラーニングの実施状況調査の結果も踏まえて分析することで、学習への動機づけにおける現在の入学前教育プログラムの効果や問題点について明らかにする。

⑤ 入学前交流会のアンケート調査

2024 年入学の経済学部早期合格者を対象として、キャリア形成や留学、起業に関する講演や、合格者同士や学部先輩との交流会を試行実施し、どういったプログラムが早期合格者の学びへの動機づけにつながるのかについて明らかにする。

⑥ 高校教員への質問紙調査

佐賀大学に合格実績のある高校の進路指導主事や 3 年生の担任 125 人を対象に、早期合格者に関して高校が抱える課題や、動機づけを目的とした入学前教育の必要性に関するアンケート調査を行い、合格決定後の早期合格者の傾向や高校側が求める入学前教育等について明らかにする。

学英語の課題に加え、新聞の要約等のレポート課題、80 人は e-ラーニングによる課題のみ、残りの 30 人は推薦図書感想文等の課題のみとなっており、現状 e-ラーニングに頼る部分が大きい。なお、e-ラーニングは 1~3 月の 3 ヶ月間、大学の Moodle で行い、内容は高校数学と中学英語である。学習習慣の維持の観点から、問題は一度に公開されるのではなく、毎週月曜日に 1 週間分配信される。

2024 年 3 月に行った e-ラーニングに関するアンケート調査では、受講生のおよそ 61%である 116 人からの回答が得られた。調査結果より、問題の難易度に関しては、64%の受講生は「適切」と回答したが、「難しい」22%、「簡単」14%と、教材の難易度が合わなかった可能性のある受講生がいることが明らかになった。また、学習の頻度に関しては、「ほぼ毎日」20%、「週に 1 回程度」50%、「2 週に 1 回程度」20%、「月に 1 回程度」10%、「ほとんどしない」0%であった。7 割の受講生にとって最低週 1 回は学習するきっかけになっていたが、週に 1 度も学習しない受講生も 3 割存在することが明らかになった。そのためか、e-ラーニングの受講期限である 2024 年 3 月 31 日の時点での課題の完了状況を確認したところ、受講生 190 人の 30%にあたる 57 人が未完了のまま期限を迎えており、中には 9 割以上の問題に取り組まないまま期限を迎えてしまった受講生もいることが分かった。この問題点に対し、各学部で現状を伝え、検討がされたが、ほとんどの学部が入学後まで継続した指導は難しいことを理由に、未完了のまま受講を打ち切ることになった。入学前教育は学習習慣の維持や基礎学力を身に付けるだけではなく、大学の初年次学習につなげる意味で学習の動機づけも重要な目的である。しかし、提示された課題を未完了のまま入学できてしまうことは、受講生に大学は課題を出さなくてもなんとかこなしてしまうといった誤解を招く恐れもあり、本来の入学前教育の目的に対し、逆効果になりかねない状態である。そのため、なぜ 30%もの受講生が未完了のまま期限を迎えてしまったのかについて原因を特定するとともに、原因に応じて課題量の調整やアセスメントの見直しの他、学びの動機づけも含めた新たな手立ての必要性が示唆された。

3 調査結果

3.1 e-ラーニングの実施状況調査

佐賀大学の特別選抜試験では 6 学部のおよそ 220 人が年内で合格が決定する。年内に合格が決定するすべての高校生が入学前教育の対象となっているが、内容は学部・学科・コースによって異なる。大まかにまとめると、110 人は e-ラーニングによる高校数学や中

3.2 入学者アンケート調査

3.2.1 入学直後の気持ちに関する調査結果

2023 年 4 月に入学者全員を対象に、入学直後の気持ち、高校生活の振り返り等について、アンケート調査を実施した。入学者 1,328 人の 97.6%にあたる

1296 人から回答が得られ、その中に早期合格者 220 人の 94.5%である 208 人からの回答も含まれていた。

「入学直後の気持ちとしてもっとも強いものを期待、安心、解放、不満、学力面での不安、対人面での不安、生活面での不安、経済面での不安、の中から1つ選びなさい」といった質問に対する結果を表1に示す。

表より、どの選抜区分においても「期待」がもっとも高いが、およそ半数の学生は期待や安心などのポジティブな気持ちよりも不安を強く感じる状態で入学していることが分かる。特に早期合格者は他の選抜区分に比べ「学力面の不安」がもっとも大きいと訴える学生の割合が高いことが分かる。これらの不安を解消するためには、単に学習課題を課すのではなく、例えば、各学部、学科に所属する大学院生又は学部4年生と連携して「大学の学習や研究と高校の学習内容との関連」や、「大学4年間のカリキュラム」、「研究やゼミナールの紹介」等、高校のどの教科、科目のどの単元が大学4年間のどの授業や研究につながっていくのかについてイメージを伴った理解を促すようなテキストや動画教材を制作し、早期合格者に学習内容の有用性を実感させながら入学前学習に取り組ませるといった取り組みが考えられる。

表1 入学直後の気持ち

	早期合格者	前期合格者	後期合格者
期待	43.5	42.4	35.9
安心	2.9	5.7	9.4
解放	1.2	4.8	5.4
満足	2.9	1.7	3.1
不満	0.6	0.3	1.8
不安（学力面）	27.6	12.4	5.8
不安（対人面）	14.1	23.6	24.2
不安（生活面）	5.3	7.5	11.2
不安（経済面）	1.8	1.6	3.1

数値は割合[%]

3.2.2 大学入学以前の行動や考え方に関する調査結果

大学入学以前の行動や考え方に関する 25 項目の質問について 5 件法を用いて調査を行った。早期合格者と一般選抜での合格者（前期・後期合格者）の結果を比較するため、25 項目それぞれの結果について F 検定を用いて有意差水準を 5%に設定し、分散を確認した後、独立な 2 群の平均値差に関する t 検定を用いて有意差水準を 5%に設定し分析を行った。その結果、8 項目で統計的な有意差が確認された。特に、「チームで活動するとき、進んでリーダーシップをとることが多い」 $t=4.64$ (>1.96)、「みんなの役に立つ事であれば、進んでその仕事を引き受けることが多い」 $t=4.04$ (>1.96)、「自分で発言しようと思ったとき、誰に言われなくても進んで発表してきた」 $t=3.92$

(>1.96)、「目標に向かって、みんなで協力して取り組むことが好きである」 $t=3.73$ (>1.96)といったように親和力や協働力に関する項目で一般選抜の合格者との間に差が大きく、早期合格者が協働的な学びに対して自信をもっていることが分かった。

3.3 ジェネリックスキル調査結果(PROG)

2023 年 12 月に学部 1 年生全員(1,328 人)を対象に PROG を用いてジェネリックスキル調査を行ったところ、全体の 76.1%にあたる 1,010 人の学生の結果が得られた。図 1 に前期合格者 609 人、後期合格者 217 人、早期合格者 184 人の調査結果を示す。グラフより、早期合格者は親和力や協働力の項目において一般選抜の合格者よりも高いスコアを示すことが分かる。この結果は入学者アンケートで早期合格者が自身の大学入学以前の行動や考え方について自己評価した結果と一致していることから、早期合格者は自らの強みを認識できていると言える。栗津ほか (2017) は能動的学修科目を選択する大学生の特性を分析する研究の中で、PROG で協働力や親和力といったコンピテンシーの高い学生は、自らの能力の高さを自覚している傾向があり、PBL⁴科目のような能動的な科目を進んで履修することを報告している。また、それらの学生は、PBL 等のアクティブ・ラーニング型の授業においてグループワークが円滑に進む可能性が高く、学習意欲の向上や課題解決する能力の伸長が期待できるとしている。ここで報告されている学生の傾向は、本研究で調査した早期合格者の特性と同様の傾向であることから、例えば、グループで「高校と大学の違い」や「なぜ大学で学ぶのか」、「大学4年間の目標とそれを実現するために入学までに取り組むこと」について議論させる等の活動は、入学前学習に目的意識を持たせ、学習意欲の維持、向上につながるのではないかと考えられる。

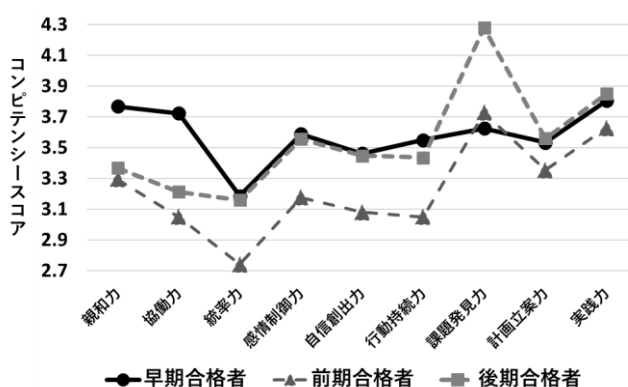


図1 ジェネリックスキル調査結果

3.4 入学前教育事後アンケート調査

3.4.1 高校の課題に関する調査結果

2024 年 3 月に早期合格者 220 名を対象に入学前教育に関するアンケート調査を行った。アンケートは Google Forms を用いて作成し、依頼文とともにリンク先をメールで配信したところ、早期合格者の 53.6%である 118 名から回答を得ることができた。

図 2 に合格から入学までの期間に早期合格者が高校から課されている課題内容についての調査結果を示す。グラフより、高校からの課題としてもっとも多いのは「大学入学共通テストの受験」であり、必須と希望制を合わせると全体の 65.2%であった。また、「補講」や「模試の受験」が課せられている早期合格者のほとんどは同時に共通テストの受験が課せられている。一方、「何も課されていない」という回答も 29.7%見られた。補講や模試の受験に加え、共通テストの受験まで必須化されている合格者に比べると、同じ期間における負担感に大きな差があることが分かる。大学がこれらの合格者に一律同じ分量の課題を与えた場合、すべて取り組むことが難しい合格者も出てくるのが想定される。そのため、入学前教育には合格者本人が、高校からの課題量に応じて分量を調整できるような仕組みが必要だと考えられる。

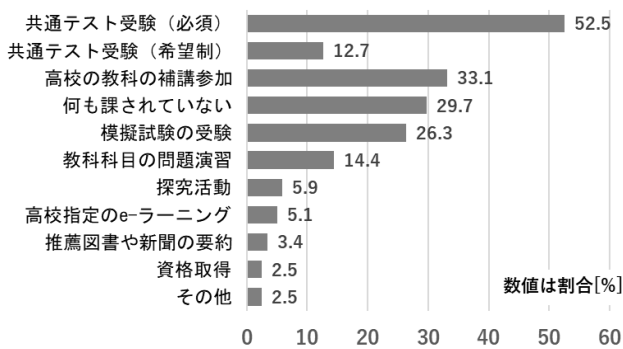


図2 高校から課せられている課題

3.4.2 入学前教育の効果や満足度に関する調査結果

表 2 に、(ア)入学前教育はあなたの学習習慣の継続に有効であった、(イ)入学前教育を通して基礎学力を身に付けることができた、(ウ)入学前教育はあなたの学習に対するモチベーション（やる気）を高めるものであった、(エ)入学前教育は将来の就職を見据えたキャリア意識の向上に有効であった、(オ)入学前教育の課題内容に満足している、に対する回答結果を示す。なお、回答者 118 人の内、e-ラーニングを期限内に完了させたグループ（74 人）を「完了」、未完了のまま期限を終えたグループ（26 人）を「未完了」、もともと e-ラーニングは課せられず、推薦図書のレポート等が課せられたグループ（18 人）を「その他」と分類し、5 項目の質問に対する回答結果について分析を行った。

完了のグループは(ア) (イ) (オ)の項目で肯定的な回答（そう思う、ややそう思う）がもっとも高い割合を示していることが分かる。毎週月曜に配信される課題を計画的に実施し、完了させるまで取り組んだことで、学習習慣の維持や基礎学力の向上を実感することができ、それが満足度の高さにつながったのではないかと考えられる。

一方、未完了のグループはすべての項目で否定的な回答（そう思わない、あまりそう思わない）がもっとも多かった。課題に取り組みはしたものの計画的には実施できず、未完了のまま期限を迎えてしまったことで、学習習慣の維持や基礎学力の向上の実感が得られず、その結果、キャリア意識や入学前教育への満足感に否定的な印象をもったのではないかと考えられる。

その他のグループは(ウ) (エ)の項目で肯定的な回答がもっとも高い割合を示し、(オ)の項目でも高い割合を示していることが分かる。このグループは推薦図書のレポート課題や、卒論発表会の聴講等、入学する学部での学びと関連のある課題が出されたことで、大学での学びをイメージできたことが学習に対するモ

表 2 入学前教育の効果や満足度に関する調査結果

	(ア)学習習慣の継続に有効であった			(イ)基礎学力を身に付けることができた			(ウ)モチベーションを高めるものであった			(エ)キャリア意識の向上に有効であった			(オ)課題内容に満足している		
	完了	未完了	その他	完了	未完了	その他	完了	未完了	その他	完了	未完了	その他	完了	未完了	その他
そう思う	33.8	7.7	22.2	29.7	15.4	27.8	25.7	7.7	38.9	14.9	15.4	44.4	39.2	11.5	38.9
ややそう思う	41.9	34.6	44.4	50.0	46.2	16.7	43.2	42.3	33.3	32.4	23.1	38.9	36.5	50.0	33.3
どちらともいえない	12.2	30.8	27.8	14.9	15.4	44.4	18.9	15.4	16.7	31.1	30.8	11.1	17.6	15.4	22.2
あまりそう思わない	8.1	19.2	5.6	4.1	15.4	11.1	4.1	26.9	11.1	17.6	15.4	5.6	2.7	11.5	5.6
そう思わない	4.1	7.7	0	1.4	7.7	0	8.1	7.7	0	4.1	15.4	0	4.1	11.5	0

数値は割合[%]

表 3 高校から課せられた課題ごとの人数の割合

	完了	未完了	その他
共通テスト受験(必須・希望制)	59.5	53.8	100
何も課されていない	33.8	38.5	0
高校指定の探究活動や資格取得等	6.8	7.7	0

数値は割合[%]

モチベーションやキャリア意識の向上につながり、その結果、満足度も高くなったのだと考えられる。

次に、未完了のグループが課題をやりきれなかった原因について考察する。表 3 に「完了」、「未完了」、「その他」のグループが高校から課せられていた課題ごとの人数の割合を示す。表より、完了と未完了のグループの合格者は課題ごとの人数の割合に大きな差がないことが分かる。そのため、「共通テストの受験」による負担だけが未完了の原因であったとは考えられない。さらに、高校から「何も課されていない」にも関わらず未完了であった者も 38.5% 存在することから、課題自体に問題があった可能性も考えられる。表 2 の 5 項目の中で、未完了のグループの否定的な回答（そう思わない、あまりそう思わない）がもっとも多いのが（ウ）の項目であったことから、e-ラーニングによる高校数学と中学英語の補填課題は未完了のグループにとって、モチベーションを向上させる効果は高くなかったことが伺える。山本ほか（2024）は入学前教育の実施状況と課題に関する研究の中で、高校生の学習履歴や習得状況、学習への姿勢等が多様化する中で高等学校レベルの学習の補填をするプログラムは、早期合格者たちの長じていたはずのモチベーションの低下を招く可能性があることについて触れている。未完了のグループについても、全員が同じ補填課題が与えられたことで、学習履歴や習得状況の違いにより課題の難易度が合わず、その結果モチベーションが低下した層が一定数存在した可能性が考えられる。

また、その他のグループの合格者は 18 人全員が「共通テストの受験」を課せられており、受験に向けた学習による負担が想定されるが、自由記述による入学前教育の感想を確認したところ「教科の課題も出してほしかった」、「課題が足りないと感じた。e-ラーニングができるといいなと感じた」等、課題量の不足を訴える高校生が複数人見られた。

以上の結果から、e-ラーニングは計画性をもって実施し完了する合格者にとっては、学習習慣が維持され、基礎学力の向上が実感できるため満足度も高くなることが分かった。また、学部での学びに関連する課題は学

習に対するモチベーションを高めたり、キャリア意識を向上させたりするのに有効であることが分かった。

一方、e-ラーニングが未完了であったグループの原因に対する考察から、全員が同じ内容の課題が課せられた場合、合格者によっては学びに対するモチベーションの低下を招く可能性があることも分かった。

3.4.3 早期合格者が求める入学前教育プログラムとは

図 3 に「どのような入学前教育プログラムが入学までの学習に対するモチベーションの維持・向上につながると感じますか。もっとも有効だと思うものを 2 つ選んでください」といった質問に対する結果を示す。「授業内容やカリキュラムの紹介」が圧倒的に多く、回答者 118 人の 71.2% が選択した。続いて「研究やゼミの紹介」が 34.7%、「大学の授業の先行履修」が 32.2% であった。大学初年次に向けて大学生活がイメージできるものや、大学生としての意識をもって課題に取り組みたいといった様子が窺える。また、「e-ラーニング」や「補講」といった高校の学習内容の復習的な内容よりも、「プレゼンや論文の書き方」といった大学で活用できるスキルを身に付けたいといった様子も窺うことができる。

図 4 に「入学前教育の中に動画の視聴や講演会を入れるとしたら、どのような内容が大学生活に対するモチベーションの維持・向上につながると感じますか。もっとも有効だと思うものを 2 つ選んでください」といった質問に対する結果を示す。「学部先輩のインタビュー」が圧倒的に多く、回答者の 71.2% が選択した。続いて「部活やサークルの紹介」が 44.1%、「一人暮らしやアルバイトの話」が 22.0% といった結果となった。就職のような少し先の話や、留学や起業といった特定の活動よりも、4 月から始まる大学生活全般のイメージが獲得できるような内容が求められていることが分かる。

図 5 に「入学前学習で対面での交流会やイベントを行う場合、どのようなプログラムに参加してみたいと思いますか。参加してみたいと思うものを 2 つ選んでください」といった質問に対する結果を示す。上位 2 項目が圧倒的に多く、「合格者同士の交流会」が 80.5%、「大学生との交流会」が 62.7% であった。コロナ禍において中学、高校時代に様々な制約を受けてきた世代であるためか、「短期留学プログラム」や「企業研修・キャリア教育プログラム」のような実践的な内容よりも、同級生や先輩とのつながりを強く求めていることが分かった。

以上の結果から、早期合格者が入学前教育に求める

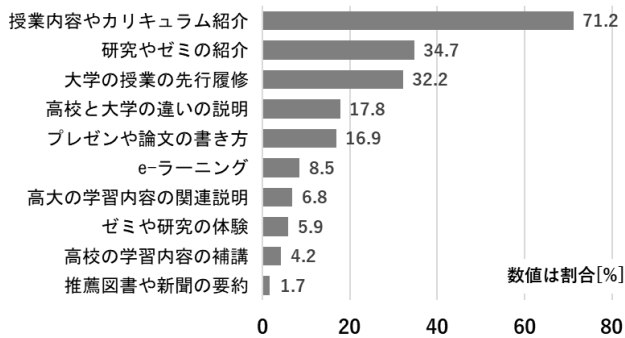


図3 早期合格者が求めるプログラムの内容

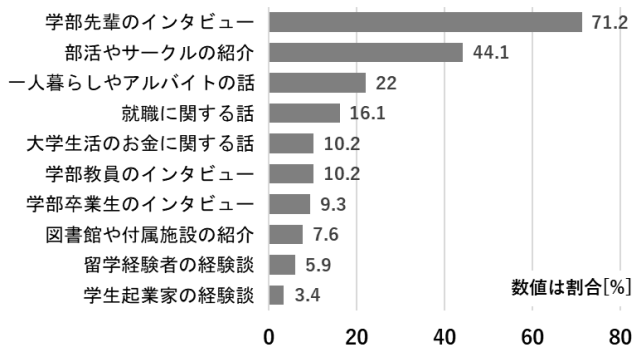


図4 早期合格者が求める動画や講演会の内容

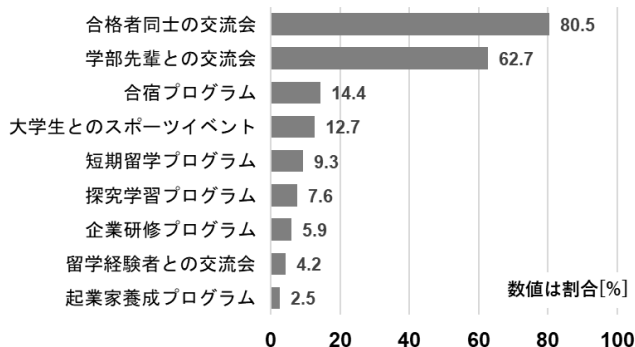


図5 早期合格者が求める交流会やイベントの内容

プログラムとは、「授業内容やカリキュラムの紹介」や「学部先輩のインタビュー」といった大学での学びや学生生活のイメージを獲得できるものであることが分かった。また、「プレゼンや論文の書き方」等、大学に入ってから必要なスキルを身に付けたり、「大学の授業を先行履修」したりすることを望む高校生が多いことが分かった。さらに、参加したい行事については、「合格者同士の交流会」や「先輩との交流会」が圧倒的に求められていることも分かった。これらの結果は、早期合格者が受験を通して大学のアドミッションポリシーを深く理解し、大学への期待と不安が入り混じった生活を送る中で、高校生でありながら、大学生としての一歩を踏み出したいといった意思が感じられるものである。そのため、そのような意思を尊重し

たプログラムを提供することは大学での学びに対するモチベーションの向上に高い効果が期待でき、その結果、学習習慣の継続や基礎学力の向上にもつながるのではないかと考えられる。

4 入学前交流会のアンケート調査結果

早期合格者のモチベーション（やる気）の向上に有効な対面プログラムについて効果検証を行うため、2024年3月に経済学部早期合格者60人の中で参加を希望した43人（当日5人欠席）を対象に対面形式で入学前交流会を試行実施した。表4に当日のプログラムを示す。

交流会の事後アンケートでは、「入学前交流会全体の満足度を教えてください」といった質問に対し、「満足」83.8%、「やや満足」13.5%、「どちらでもない」0%、「やや不満」0%、「不満」2.7%であり、プログラム全体としての満足度は高かった。

次に、「大学生活のイメージの獲得や学習へのモチベーション（やる気）の向上に有効であったと思うプログラムをすべて選んでください」といった質問に対する結果を図6に示す。グラフより、やはり多くの

表4 経済学部入学前交流会プログラム

1	挨拶・全体説明(10分)
2	キャリア形成の重要性について(30分)
	・近年の就職活動の実態
	・佐賀大学の就職状況
	・佐賀大学の就職支援
3	留学と留学支援の紹介(30分)
	・留学支援の紹介
	・留学経験者による経験談
	・留学生支援ボランティアの紹介
4	経済学部の紹介(15分)
	・経済学部教員挨拶
5	昼休み(50分)
	起業家支援と産学連携の紹介(40分)
6	・産学連携と知的財産の紹介
	・起業家支援プログラムの紹介
	・入学後の行動指針への助言
	・施設見学
7	学部先輩との交流会(40分)
8	合格者同士の交流会(40分)
9	アンケート記入(10分)
10	解散・個別質問対応

早期合格者が入学前教育プログラムに求める「合格者同士の交流会」と「先輩との交流会」がモチベーションの向上に有効であったことが分かる。また、「就職やキャリア支援に関する説明」についても「先輩との交流会」に迫る高い割合を示していることが分かる。大学のキャリアセンターと連携して、就職状況等の具体的な数値や大学の支援、大学で身に付けておきたいスキル等、大学の入り口から出口までがイメージできるような説明が行われたことが、モチベーションの向上に有効にはたらいたのではないかと考えられる。

自由記述による感想では、「入学前の友人関係への不安が解消された」、「先輩が丁寧に大学について教えてくれ、大学に対する不安が減った」といったように不安の解消や緩和に関する記述や、「単位やサークル、バイトについて知ることができてよかった」といったように、大学生活のイメージの獲得に関する記述が多数見られた。また、来年以降、学生スタッフとして交流会に参加したいと思いますかといった質問については、「思う」が 40.5%、「どちらとも言えない」が 48.6%、「思わない」が 10.8%と、学生スタッフとしての活動にも前向きに考える早期合格者も多数存在することが分かった。

以上の結果から、合格者同士や学部先輩との交流会は早期合格者が抱える不安を解消し、大学生活の具体的なイメージの獲得に有効であることが分かった。また、様々な先行研究において入学前教育に関わる職員の不足がたびたび課題視されているが、このような取り組みを継続することで、今年度の参加者が次年度の参加者を支援するといったようなエコシステムを構築することができ、持続可能性も含めたプログラム設計が可能となるのではないかと考えられる。

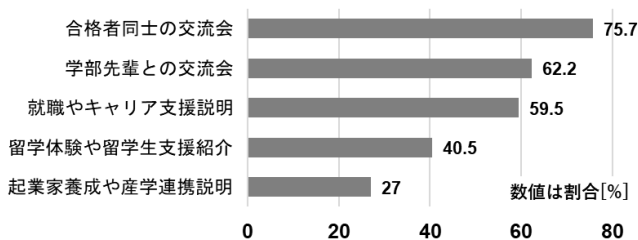


図 6 交流会参加者が有効だと思ったプログラム

5 高校教員への質問紙調査結果

2024 年 6 月、佐賀大学入試課とアドミッションセンターで九州地区の各県を回り、高校の進路指導主事や高校 3 年生の担任教員を対象に大学説明会を行った。その際、年内合格者の増加とともに高校現場で課題になっていることや、入学前教育に関する認識につ

いて、自由記述と選択式による質問紙調査を行い、九州地区 7 県 125 人の高校教員からの回答が得られた。

「年内合格者の増加とともに高校現場で課題になっていること」についての自由記述による質問では、回答者の 58.6%から「合格が決定すると、（早期合格者の）モチベーションが低下し、学力が下がる傾向がある」といったように、早期合格者の学習へのモチベーションの低下についてや、一般選抜に向けて取り組んでいる他の生徒との温度差についての記述が見られた。また、回答者の 32.0%が、「一般選抜の生徒の指導があり、早期合格者の指導に割ける時間はない」、「大学の入学前教育の課題まで指導するのは負担」といったように、高校教員が早期合格者の指導に割く人員も時間もないことを記述していた。

また、「学びへの動機づけを目的とした入学前教育は必要であると思いますか」といった質問には、「そう思う」73.6%、「ややそう思う」21.6%、「どちらともいえない」4.8%で、「ややそう思わない」と「そう思わない」はなかった。肯定的な回答の理由については、「特別選抜の準備を行う中で生徒の興味関心が高まっている。動機づけのプログラムにより、この意欲の向上を維持したまま大学に入学することができると考えるから」といったように、生徒の学びへのモチベーションや意欲を維持できるといった記述がほとんどであった。なお、「どちらでもない」とした理由については、「まれに大学からの課題があっても学習や生活態度が悪くなる生徒がいるから」、「私たちにも何をしたら動機づけになるのか分からないから」といったものが見られた。

以上の結果から、合格決定後に学習意欲が低下し、一般選抜を受験する生徒との間で学習意欲に差が生じる早期合格者が一定数存在することや、合格決定後には高校教員からの指導を受けることが難しい早期合格者も存在することが明らかになった。そのため、多くの高校教員は大学側に動機づけを目的とした入学前教育の実施を望んでいることも明らかになった。

6 本研究で明らかになった早期合格者の特性

本研究では 6 種類の調査結果の分析を通し、早期合格者の特性を明らかにした。

① 課題の取り組み状況とモチベーションの変化

e-ラーニングは計画性をもって実施し完了する合格者にとっては、学習習慣が維持され、基礎学力の向上を実感できるものであるが、全員が同じ内容の補填課題を課せられた場合、合格者によっては学びに対するモチベーションが低下する可能性

がある。また、推薦図書レポート課題や卒論発表会の聴講等、大学での学びがイメージできるような課題は、学習に対するモチベーションの向上につながる可能性があり、満足度も高くなる。

- ② 入学直後の気持ちと行動特性に関する自己評価
およそ半数の学生は期待や安心などのポジティブな気持ちよりも不安を強く感じる状態で入学していることが分かる。特に、一般選抜の合格者に比べ、学力面での不安を訴える割合が大きい。行動特性については、親和力や協働力に関する項目で一般選抜の合格者との間に統計的な有意差が確認された。
- ③ コンピテンシーの特性
一般選抜の合格者に比べ、親和力や協働力の項目で高いスコアを記録している。これは、行動特性に関する自己評価の結果と一致しており、自らの強みについて認識できていることが分かる。
- ④ 高校から課せられている課題と求めるプログラム
65.2%の早期合格者は共通テストの受験を必須、又は希望制で課されている。一方、29.7%は何も課されていない。求めるプログラムとしては、授業内容の紹介や学部先輩のインタビュー等、大学の学びや生活がイメージできるものや、論文の書き方等、入学後に必要なスキルを身に付けられるものが多い。また、合格者同士や先輩との交流会を望む回答も多く、試行的に実施した結果、学習へのモチベーションの向上や大学生活への不安の解消といった効果が確認された。
- ⑤ 高校教員から見た合格決定後の傾向
125 名の高校教員の 58.6%が、早期合格者の課題として、合格決定後に学習に対するモチベーションが低下し、一般選抜の生徒との間に温度差が見られるといった趣旨の内容を記述した。また、学習への動機づけを目的とした入学前教育の必要性については、95.2%が肯定的な回答を示した。

7 今後の課題と展開

現在、本研究で得られた知見を基に本年度実施する入学前教育プログラムの設計を行うとともに、学部教員からの意見の聞き取りを行っている。その中には、「手厚い入学前教育を実施するのはよいが、一般選抜の合格者との間に差を生むことにつながらないか」といったことを懸念する意見もある。この問題に対して、例えば、入学後の各学部の大学入門科目の中で、早期合格者が高校と大学の違いや、各学科、コースの研究やカリキュラムの特徴、様々な支援制度、大学で学ぶ

理由等について説明する機会を設ける等、早期合格者が各学部の学びの核となって一般選抜の合格者をファシリテートし、学生全体の学びを加速させるような取り組みを実施することを検討している。これが実現すれば、入学前教育の新しい可能性を示すことにつながると考える。

今後は、設計した入学前教育プログラムを実施し、効果検証を行うことで、早期合格者の動機づけに有効な入学前教育プログラムの要素について明らかにし、入学前教育の実質化のモデルとなるプログラムを提案したい。なお、本研究で対象とした大学は一校であるため、すべての大学に共通するデータではないことに留意する必要がある。早期合格者の特性を一般化するためには、調査校を拡大する必要がある。

注

- 1) 「学習意欲」と「学習に対するモチベーション」は本来、異なる意味である。しかし、本研究で参考にした先行研究や高校教員の自由記述においてはほぼ同じ意味で使用されていた。そのため、本研究では参考にする資料によって言葉を使い分けるが、同じ意味合いで使用している。また、「学習の動機づけ」については、「学習意欲や学習に対するモチベーションの向上」といった意味合いで使用している。
- 2) Zimmerman ほかに (2009) は、自己調整促進プログラムの実践的研究において、最初に生徒の学習状況や教師へのインタビューを通じて生徒に対する診断的評価を行った上で介入プログラムを設定、実施することで、動機づけが促進され、学業達成が改善したことを報告している。
- 3) PROG (Progress Report On Generic Skills) は学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発したアセスメントであり、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向、といったジェネリックスキルを育成・評価するためのものである。
- 4) PBL (Project Based Learning) はアクティブ・ラーニングの手法の 1 つで、課題解決型学習などと訳されている。

参考文献

- 栗津俊二・松下慶太 (2017). 「能動的学修科目を選択する学生の特性 PBL 科目を選ぶ動機とコンピテンシー」『実践女子大学人間社会学部紀要』13, 29-39.
- 山本以和子・花堂奈緒子・林寛子・富山明華・陣内未来(2024). 「高大接続改革に係る入学前教育の実施状況と課題」『大学入試研究ジャーナル』34, 182-189.
- Zimmerman, B. J. and Cleary, T. J. (2009). "Motives to Self-Regulated Learning : A Social Cognitive Account", in K. R. Wenzel and A. Wigfield (eds.), *Handbook of Motivation at School*, NY : Routledge, 247-264.